

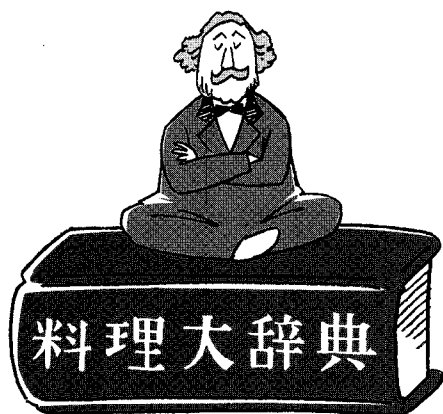
## 壮大な胃袋が生んだデュマの大長編と「料理大辞典」

アレクサンドル・デュマといえば、フランスが誇る世界的大文豪。「三銃士」や「モンテ・クリスト伯」「鉄仮面」など、そのスタミナぶりを裏書きする大長編で名高い。ちなみに、彼の代表作といわれる「モンテ・クリスト伯」は、これを完全上演するのに三晩かかったといい、六十八歳で死ぬまでに九十一の戯曲と数百におよぶ小説、紀行文、料理書、伝記などを書きまくった。ある作家が息子の小デュマ（父のほうは大デュマと呼ばれた）にその秘密を尋ねたところ、「なに親父は、夜中に大食いする癖があるので、それで眠れなくて、夜通し書いてるってわけですよ」

と答えたとか。なにしろ美食家のうえに大食家だったことで有名で、たとえばこんなエピソードが伝えられている。

デュマは、曰ごろ「おれは結婚なんかせずに五百人の『小デュマ』を作ってみせるぞ」と豪語していたように、いつも自宅に三、四人の愛人を住ませ、夜はそれらの愛人を引き連れてバリでも指折りのレストランで豪遊するのが日課だった。そしてレストランでは、好みの一角を占拠するや、いつも、

「肉を十皿に魚を十皿、そしてスープを三種類。いずれも五人前ずつ持って来い！」



と叫ぶのだった。そのあと、やおら女たちのほうに向かって「さあ、君たちも何か注文したまえ」とのたまうのである。伝えられたところによると、デュマは「メニュー」などという代物を開いて見たことがなかったという。

そのため、コックたちは適当に肉や魚の料理を見つくるって出すほかなかったが、魚の皮は金輪際きらいで、うっかり皮をつけたまま出そうものなら、ふだんは人一倍気前のいい彼も決してチップを置かなかったとか。

デュマ自身、狩りとともに料理にも相当の腕を持っていたといわれ、晩年、自分の文学の集大成として「料理大辞典」なる大著をものしている。なにしろ、これまた千ページを軽く超す超大作で、それもげてもの料理から自作の料理までをふくむ、エピソードありレシピ（作り方）ありのごった煮的な怪辞典。なかに、「牛のフィレ肉・モンテクリスト風」なんてちゃっかりしたものであるところが愛嬌。